



ミャンマー連邦共和国 派遣期間 2017年4月～2020年3月

在ミャンマー日本国大使館附属ヤンゴン日本人学校 実践報告

～ 日本とミャンマーのつながりに学ぶ ～

帯広市立西陵中学校
教諭 武山公之

1 ミャンマー連邦共和国について

① 国の概要

アジア最後のフロンティアと称される「ミャンマー」。正式名称は、ミャンマー連邦共和国。

東南アジアのインドシナ半島西部に位置する共和制国家です。独立を果たした1948年から1989年までの国名はビルマ連邦でしたが、天安門事件を境に現国名に変更されています。



南西はベンガル湾、南はアンダマン海に面しています。南東はタイ、東はラオス、北東と北は中国、北西はインド、西はバングラデシュと国境を接します。人口の約6割をビルマ族が占め、他に、カレン族、カチン族、カヤー族、ラカイン族、チン族、モン族、ヤカイン族、シャン族、北東部に中国系のコーカン族などの少数民族がいる多民族国家です。ビルマ族が用いるビルマ語（ミャンマー語）が公用語として用いられていますが、地方に行くと通じない場合もあります。

ミャンマーは、全人口の約90%が仏教徒で、いたるところに仏塔（パゴダ）が建てられています。仏教に次いで勢力のある宗教は、キリスト教（約5%）、イスラム教（約4%）です。ミャンマーをはじめ、スリランカ・タイ・カンボジア・ラオスにみられる仏教は、上座部仏教と呼ばれています。日本にもたらされた仏教は、大乘仏教ですので、同じ仏教ですが、上座部仏教は大乘仏教に比べて戒律が厳しく、修行のあり方などに違いがあります。



男子の仏教徒は、一生のうちになくとも一度は僧の生活をするのが望まれ、実行されています。男の子が7歳～10歳くらいになると、親は子どもを僧院に預け、僧の生活を経験させるようです。1週間から3ヶ月の修行の後、再び元の生活に戻ります。ミャンマー人の仏教徒は、「仏・法・僧」を心から崇敬し、家庭にあつては両親を、学校にあつては先生を敬う習慣をもっています。

このように、仏教はミャンマーの人々の生活と深く結びつき、人々の日常の行動や考え方にまで深く影響を与えています。

キリスト教は、主にカレン族・カチン族・チン族などの山岳民族の間で深く信仰されています。また、インド系ミャンマー人の間では、イスラム教やヒンズー教を信仰する人も多く、ヤンゴン市内にもたくさんのイスラム教寺院やヒンズー教寺院があります。

1988年以降は、市場開放政策が推進され、民間事業者による農産品の輸出入の自由化や、外国投資の受け入れ促進などの措置がとられました。まずは1988年10月、それまでの経済面での鎖国政策を改めて民間貿易ができるようになりました。つぎに民主化により拡大の兆しが見え、1990年後半から第一次ミャンマー投資ブームが起きましたが、その後欧米による経済制裁で再び経済が停滞しました。しかし、2011年ティンセイン大統領のもとで民主化が加速され、現在第二次ミャンマー投資ブームが到来し現在に至っています。

そして、2015年総選挙が行われ、アウン・サン・スー・チー氏が党首を務めるNLDが圧勝、第一党となり、軍事政権から政権を移譲されることとなります。しかし、2008年に制定された憲法に基づいて、アウン・サン・スー・チー氏は大統領とはならず、国家最高顧問に。また憲法に基づいて設置されている国会では、上院にあたる民族代表院も下院にあたる人民代表院も議員定数の4分の1は、国軍司令官により指名される（民族代表院：224人。うち56人が軍司令官による指名枠。人民代表院：440人。うち110人が軍司令官による指名枠。）こととなっており、これによって、新政権も軍との関係をうまく構築させながら政権を運営しなくてはならないのが実情です。

② ヤンゴン（旧首都）の概要

ミャンマーの旧首都で、ヤンゴン管区の州都であるヤンゴン（旧名称はラングーン）は、国内最大都市であり、エーヤワディー川のデルタ地帯に位置しています。人口は736万人（不確定）、総面積576 km²の街です。ここには、2600人程の日本人が生活をしています。

季節は、次の3シーズンに分けることができます。

☆ | 暑季 | 2月下旬～5月中旬

最高気温の平均40℃前後・最低気温25℃前後

☆ | 雨季 | 5月下旬～10月中旬

最高気温の平均30℃前後・最低気温22℃前後

☆ | 乾季 | 10月下旬～2月中旬

最高気温の平均30℃前後・最低気温15℃前後



赴任時期が4月上旬なので、1年で一番暑い時期に赴任することになりました。ただ、学校の職員室や教室、自宅や車の中、商業施設内はエアコンが完備していますので、快適に過ごすことができました。しかし、電力不足により、1日に数回ある停電、不定期の計画停電などがあるため、コンドミニアム等では発電機を完備しています。

2 在ミャンマー日本国大使館附属ヤンゴン日本人学校の特徴

① ヤンゴン日本人学校の概要

多くの日本人が集まり、「日本人の子どもにもきちんと学習をさせる場所をつくろう。」という意見があがり、ある会社の住宅の一部屋を借りて補習授業が始まりました。しかし、教員数が足りず、毎日通学することができたのは4年生以上の子ども達だけでした。3年生以下はインターナショナルスクールに通いながら、週に1、2回だけ「ラングーン日本人補習校」に通っていたそうです。2年間の補習校



の後、昭和39年（1964年）6月3日、世界で2番目の日本人学校がビルマに設置されることとなります。その後、昭和47年（1972年）4月に、学校名が「ラングーン日本人学校」になりました。1989年から、国名が「ビルマ」から「ミャンマー」に変わり、首都の名前も「ラングーン」から「ヤンゴン」に変更になったため、同時に学校名も「ラングーン日本人学校」から、現在の「ヤンゴン日本人学校」になっています。そして、平成2年（1990年）より現在の場所に設置されています。

在ミャンマー大使館附属ヤンゴン日本人学校

設置者：ヤンゴン日本人会 運営主体：ヤンゴン日本人学校運営委員会



※ 「大使館附属」となっているのは、現地の法律では「外国人」および「外国企業」などは不動産を取得、または現地法人を設立することができないため、大使館を通じてミャンマー政府より土地を借用しているためである。

令和2年3月現在

	幼稚部				小学部							中学部				小中 計	総計
	年少	年中	年長	計	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	1年	2年	3年	計		
男子	1	4	4	9	8	6	10	8	10	10	52	7	7	5	19	71	80
女子	6	6	7	19	12	14	15	8	5	12	66	6	3	5	14	80	99
計	7	10	11	28	20	20	25	16	15	22	118	13	10	10	33	151	179

幼稚部・小学部・中学部を併置し教育活動を行っています。また、その特性から、幼小中の連携を授業の中で行う、また小学校1年生（一部）から教科担任制としています。教職員みんな子ども達を育てるという意識で行っています。

② 施設について

平成26年（50周年の節目の年）に、児童数増加を見込み、2階建ての校舎（アセンブリ棟）が落成しました。この新校舎1階には、4つの通常教室と特別教室、2階には体育館としても使用できる講堂があります。

しかし、落成後も急激な児童・生徒数増加は止まらず教室不足となり、平成29年度～平成30年度は幼稚部（年少）の募集を停止せざるをえなくなりました。この間に校舎を一部取り壊し、3階建ての新校舎の建設が進められ、無事平成30年12月に落成しました。普通教室14教室、理科室、保健室、校長室、事務室を備え、児童・生徒数増加にも対応できるようになりました。



③ 特色ある教育活動

○ 日本人として

本校に学ぶ子ども達は、生活言語がミャンマー語であったり、日本での生活経験が少なかったりする子が珍しくありません。多様な生活背景をもつ子ども達に、日本人としての資質を養い、日本語力を高めることは本校の教育課題の一つです。そのため、「朝読書」や「1分間スピーチ」に取り組んでいます。2月に行われる「弁論の会」は、ミャンマーで考えたことや自分の夢などをテーマに、児童生徒がスピーチする伝統行事です。（平成29年度より、中学部1年～3年生までで実施）。



また、平和教育の一環として日本人墓地墓参も行っています。ミャンマーは太平洋戦争時「インパール作戦」が展開された土地。多くの日本兵がこの地で命を落としました。ヤンゴンにある日本人墓地には、戦没した御霊と共に、その以前にこの地で命を落とし日本に帰ることが叶わなかった方々が祀られています。



その他にも、ヤンゴン日本人学校を訪れてくれた様々な団体との交流事業を行っています。「NPO法人心魂プロジェクト」は平成29年度より毎年ワークショップを開催してくれ、その後本番のステージでの合同発表を行ってくれます。また、昨年9月にはFIFAワールドカップ2022カタール大会アジア2次予選で訪れた日本代表チームとも交流することができました。



○ 国際人として

ヤンゴンには、現地校、インターナショナルスクール、フレンチスクールなど各国の教育施設があり、多くの子ども達が学んでいます。これらの子ども達との交流活動は、子どもの世界観を広げる上で貴重な体験となります。本校では、文化・スポーツ交流を中心に国際理解教育を推進しています。その代表的なものが、本校最大の行事「チルドレンズフェスティバル」です。各国の子ども達によるステージパフォーマンスと日本人学校児童・生徒による日本の伝統文化紹介が行われます。また、隣接している聴覚障害児のための現地校「マリーチャップマン校」などの児童生徒を招待して「サッカー大会」を行っています。



○ 社会人として

進路指導・キャリア教育、現地理解学習の一環として、社会体験を大切にしています。現地の事業所（工場等）の見学や体験学習を通して、現地の様子や日本との関わり、自分の進路などについて考える機会とします。令和元年度から中学2年生を対象として、現地日本企業の協力のもと「職場体験学習」にも取り組んでいます。



中学部宿泊体験学習では、マンダレーやバガン王朝の遺跡やパゴダを見学したり、JICAの協力でバガン近郊の農村で、日本の支援によって農業がどのように変容したかのインタビュー活動（生徒がミャンマー語で直接農家の方達に聞き取りしました。）を行いました。小学部6年生の宿泊体験学習では、現地の子供達と交流のほか、工場の見学や国立文化芸術大学での人形劇体験、伝統の陶器工房での製作体験を行いました。また、現地理解学習として、低学年の生活科ではチンロン遊びを行い、3年生の社会科では、学校のまわりの地図づくり、4年生の社会科ではショッピングモール見学などを実施しています。（常に治安面を考慮に入れて、実施の有無を決定しています。）

3 日本とミャンマーのつながりに学ぶ

平成28年11月、安倍晋三首相はミャンマーのアウン・サン・スー・チー国家顧問兼外相と都内の迎賓館で会談し、ミャンマーへの包括的な経済協力のため政府開発援助（ODA）や民間投資をあわせ5年間で8000億円規模の支援を行うと伝えました。これを受け、JICAミャンマー事務所が中心となり、官民共同してミャンマーへの支援が行われています。その動きを児童・生徒達にも感じてもらうべく、JICAミャンマー事務所の協力を得て、日本の支援によって作られた施設見学を行いました。



① ヤンゴン管区気象レーダー見学

平成20年5月に発達したサイクロン・ナルギスがミャンマーに上陸。13万8千人以上の死者を出し、240万人以上が被害にあう大惨事となりました。この原因の一つが、旧来然とした観測のみで行われていたミャンマーの気象予報だといわれています。データ収集量が少なく（気温・地温・降水量など、基本的な情報の収集しかしていなかった。）、各地点で収集したデータも無線通信で伝えられ、それを手入力しての予報では、サイクロンの発達とその進路予想が極めて困難なのは自明の理です。そこで、ODAでヤンゴン（ミャンマー南部の都市）、マンダレー（ミャンマー北東部の都市）、ラカイン（ミャンマー西部の都市）の3か所に気象レーダーを設置。3点観測によるミャンマー全土のデータ調査が可能になりました。

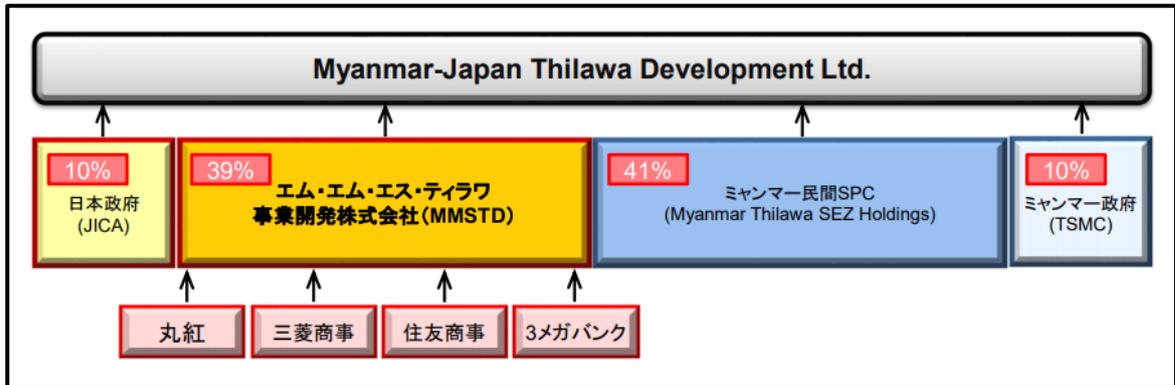


レーダー完成は平成28年。私が赴任したのが平成29年だったので、レーダーが実働した翌年から視察しています。私の専門教科が中学理科のため、理科と総合的な学習の時間（現地理解教育）との横断的教育として実施しました。生徒の中には実際にナルギスの被害にあった生徒もあり、（ナルギスにより、ヤンゴン日本人学校の校舎も大きな被害を受け、修理の間、別施設を間借りして授業をしていたそうです。）大変意欲的に施設見学していたのが印象的でした。今までの観測と、レーダーによる雨雲の3D画像などの比較を通じて、気象データ、それを解析する技術の重要性を学ぶことができました。



② ティラワ経済特区見学

ティラワ経済特区はヤンゴンから南東約20 kmに位置しています。2011年11月、日緬首脳会談(バリ)にて、ミャンマーから日本に対しティラワ開発への協力が要請されました。それを受け2013年10月、麻生副総理、茂木経済産業大臣、ウィン・シェイン財務大臣立会いの下、日緬出資者間で合弁契約書に署名され、2014年1月、日本とミャンマーが共同出資した Myanmar Japan Thilawa Development Limited 社が設立され、ティラワの開発が始まりました。



総面積2400haの広大な土地はいくつかに区分し開発され、最初に開発したZone-A(405ha)については全ての土地が完売。現在Zone-Bの開発が進められています。そこに日本企業をはじめ多数の企業が進出。ミャンマー人を雇用し、生産活動を行っています。

2019年9月、JICAミャンマー事務所の協力のもと、キャリア教育の一環として中学部3年生とティラワを訪問しました。ミャンマーの道路はあまりよくなく、段差や凸凹によって常に車が揺られるのですが、日本が道路整備した区間に入った途端揺れが全くなくなり、生徒達から感嘆の声が上がりました。道一つとっても技術によって全く別物になることを体感しました。



ティラワ経済特区では、MJTD (Myanmar Japan Thilawa Development Limited の略) 内にあるワンストップサービス (ティラワ経済特区内の工場運営に必要な手続きがこの場所だけでできるよう、ミャンマー各省の担当官が集められた施設。通常は各省を自分で周らねばならず、手続きに非常に時間がかかる。JICA専門官の発案で設置された。) を見学し、その後MJTD、ヤクルト、JFTスチールなど、日本の企業を訪問。ミャンマーという異国の地で工場を作り、その国の人達のために品物を作り販売する。どんな想いで事業展開しているのか。現地の人を雇用するにあたってどのような配慮をしているのか。考え方に触れることで、「自分が将来外国で働くとしたら」と自分の未来に思いを馳せる生徒達の姿が見られました。

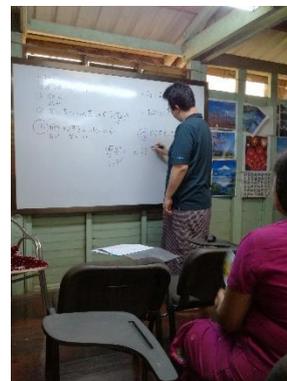


4 ミャンマーの人々とのふれあい

ヤンゴン日本人学校以外で、以下のような活動をしてきたのでご紹介します。

① 僧院での日本語指導

ミャンマーの仏教寺院には、「僧院」と呼ばれる施設を備えたものがあります。寺院の一角にある部屋が誰に対しても無料で解放されているのです。その一室を借りて、日本語を学びたいミャンマー人の方達に日本語指導を行っていました。レベルも千差万別で、長年通っている方もいれば、日本企業への就職を目指して門をたたいた駆け出しの人もいます。レベルの違い、学びたい内容の違い、言語の違いによる意思疎通の難しさなど、授業を進めていく上での困難さはたくさんありました。しかしながら、授業が終わった後のミャンマーの方々の喜んだ顔を見ると、大変だけれども頑張ろうという気持ちがわいてきて、教材準備にも熱が入りました。



10月下旬に「ダディンジュ」という時期があります。元々は天にいるお釈迦様が満月の日に地上に戻ってくるといういわれなのですが、この時期に生徒達は自分達を指導してくれている先生方に贈り物をし、日頃の指導を感謝するという文化がミャンマーにはあります。普段教えている生徒の皆さんが私の前に正座し、「日頃から私達を指導してくださり、本当に



ありがとうございます。先生のお陰で学ぶことができ、私達は本当に感謝しています。先生にはいつまでも健康でいていただき、私達にいつまでも指導してください。」と謝辞を述べられました。贈り物をいただいたとき、嬉しさと共に、「私は本当にこの人達が望む指導ができているのだろうか。もっとできることがあるのではないか。」と強く感じました。言葉や文化の違いを超えて人の想いを受け取るという経験をしたことがなかった私にとって、自分と人のかかわりということを実感させる大切な場所でした。ここでの経験から、「教育」というものの原点を垣間見ることができました。日本に戻った今、ここでの気持ちを忘れずに生徒達に関わることを心がけています。

② ヤンゴン吹奏楽団 Shwe Gita～楽器の図書館活動

日本の学校に赴任している間、吹奏楽部の顧問をしていました。ヤンゴンでも楽器が好きな方達が集まり演奏活動をしていると聞き、私も活動に参加させていただきました。

ミャンマーの小学校では、多くの東南アジア諸国と同様「音楽」という授業がありません。そのため、楽器を演奏したくてもやり方がわからないという人達がたくさんいます。そのような人達に、楽器に触れて演奏方法を学ぶ場の提供と、演奏方法の指導、楽器の貸し出しと一緒にした「楽器の図書館」という活動を行っていました。楽器は日



本で使わなくなったものを寄贈してもらい、場所はミャンマーの楽器店に提供していただき、指導は楽団員が手分けして行う。先に述べた僧院日本語指導と同じですが、初めて吹いたり、叩いたりする楽器から出る音に喜ぶ生徒達の姿を見ることが本当に嬉しかったです。言葉の壁があり、こちらが意図していることを十分に伝えられない場面が多々ありましたが、そんな場合でも身振り手振りで伝えようとする私達の姿を見て、一生懸命に真似て演奏しようとする生徒の姿に勇気をもらい、一緒に練習しました。



Shwe Gita は年に一度定期演奏会を行っていたのですが、努力を重ね上達した生徒は、その演奏会で一緒にステージに立ち、演奏を披露することができました。言葉の壁を越え一緒に演奏できたことは、私の大切な思い出の一つです。



楽器の図書館の活動以外にも、団として慰問演奏も機会を見つけて行っていました。学校に通うことができないストリートチルドレンなどを対象に行う場合は、演奏会後子ども達に昼食をふるまうこともありました。そんな慰問演奏会の中でも2019年1月に行った会は、特に私の心に残っています。



「ミャンマーで一番有名な日本の曲は？」と尋ねると、ほとんどの人から帰ってくる答えが長瀬剛さんの「乾杯」です。日本のみならず、遠く離れた地ミャンマーでもとても愛されている曲です。この演奏会でも最後の曲として乾杯を演奏したのですが、乾杯の演奏が始まるとそれまで静かに曲を聴いていた子ども達が急に立ち上がり、乾杯を熱唱し始めたのです。演奏終了後も興奮の渦は収まらず、猛烈なアンコールの拍手を受け、もう一度乾杯を演奏しました。会場中が歌声と楽器の音で埋め尽くされ、聞いていた子ども達が本当に心の底から楽しんでいる様子が演奏している我々にも伝わり、とてもよいステージでした。



この演奏会が、ミャンマーで初めて作られた日本語新聞『Yangon Press』に特集され、掲載されました。この記事は多くの在留日本人の目にとまったようで、こちらの知り合いの方からたくさん声をかけていただきました。

私の趣味から始めた活動だったのですが、多くの人に感動を与えることができて、そしてその感動を返してもらうことができ、本当によい経験となりました。

第69号 2019年2月1日発行 | Yangon Press - The first Japanese media in Myanmar - | Special Article | 15

日緬交流のトピックス

ヤンゴン在住者による吹奏楽団のボランティア活動 恵まれない人々に届ける善意の演奏が評判を呼ぶ

両手は不自由だが、音楽を通して他者に貢献できる喜びがある。不働不動の仲間やミャンマーへの移住者に対するさまざまなアドバイスサービスを行っている Myanmar A & Co. Ltd.の社友兼ボランティア活動の中心人物である、2019年1月10日、ヤンゴン在住の若者たちによるボランティア活動の様子が写真に収められている。

この吹奏楽団が、先月10日にヤンゴンの公園で開催された「Yangon Press」の記者会見で、今年初めての演奏会を行った。今年初めての演奏会は、午前10時から午後1時までの間、約100人の観客が参加した。この吹奏楽団は、ヤンゴン在住の若者たちによって組織された。この吹奏楽団は、先月10日にヤンゴンの公園で開催された「Yangon Press」の記者会見で、今年初めての演奏会を行った。この吹奏楽団は、ヤンゴン在住の若者たちによって組織された。

演奏後、子供たちはヤンゴンの公園で演奏した。子供たちは、これまでにないような演奏会に参加し、手拍子やアンコールも自然に出た。大人も感動の表情をみせた。

「会社が休日は、音楽が大好きで、そして私たちが演奏で少しでも役に立て、楽しんでいる」と、

子供たちも楽しんで演奏中

5 おわりに

3年間という限られた時間ではありましたが、ミャンマーという国で生活できたことは、私だけではなく家族にとっても大きな財産です。ミャンマーでも上水道は通っていますが、日本のように衛生的で安心した水は蛇口から出てきません。歯磨きをするのもミネラルウォーターで行います。赴任当時小学1年生だった私の娘が、日本に帰ってきたときに洗面所にミネラルウォーターがないことに驚き、「おとうさん、水道の水が飲めるって凄いことなんだね!」と興奮しながら話してくれた姿を見たときに、家族で赴任して本当によかったと感じました。3年間の生活で学んできたことを、微力ではありますが、これから私とかかわる子ども達に伝えていきたいと思います。

同時に、3年間の生活を経て、今私の胸には次のような想いがあります。

我々の「当たり前」は、世界の「当たり前」ではありません。相手に寄り添い、相手の「当たり前」を受け入れて共に進む。その姿勢が相手に伝わり、今度は相手から寄り添ってきてくれる。それこそが本当の「共生」ではないでしょうか。

世界のグローバル化は加速の一途をたどっています。コミュニケーション能力や柔軟な思考力、表現力など、変化の激しいこの時代を生き抜いていくため、次世代を担う子ども達には多くの力が求められています。しかしながら、それらの力を身につけると同時に、相手を理解し相手に寄り添うことができる日本人の持つ道徳性こそが人と人をつなぐ架け橋となるのではないのでしょうか。道徳性を磨き、それを世界で発揮することこそが「共生」への近道になると強く感じています。

3年間、日本ではできない様々な経験をすることができました。それら全てが私の力ではなく、支えてくれた方々のお陰です。私を支え、学ばせてくれた全ての人達に、この場を借りてお礼申し上げます。私が経験してきたことを北海道・十勝の子ども達に伝え、そこから一つでも世界を感じてほしい。それが実現するよう、日々の教育活動に邁進してまいります。

